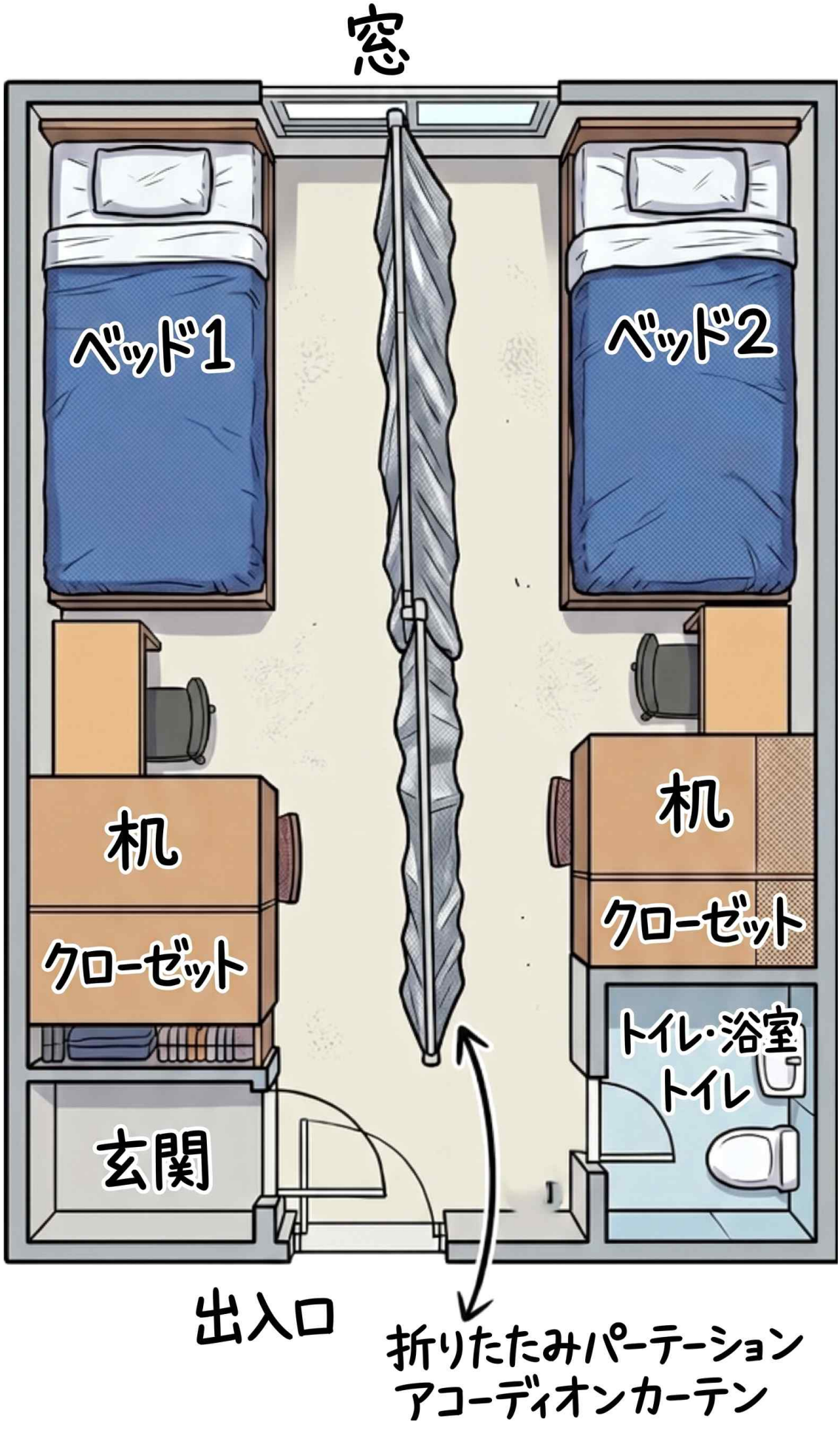



窓
ベッド1
ベッド2
机
クローゼット
机
クローゼット
トイレ・浴室
トイレ
玄関
出入口
折りたたみパーテーション
アコーディオンカーテン

［ 2015年5月1日。金曜日。民法総則の講義室 ］

5月の初日、キャンパスはすでに春の絶頂を過ぎ、初夏の気配を帯び始めていた。法学館201号の大講義室では、第7期生たちが金曜最後の授業である民法総則を受講していた。最後の時間に差し掛かると、窓の外から差し込む日差しは長く伸び、教授の声は早くも稼働しているエアコンの音に混ざって、気だるげに散っていった。

授業終了まではまだ30分ほど残っていたが、講義はすでに締めくくりの段階に入りつつある空気が漂っていた。学生たちは申し合わせたかのように腰を浮かせ、鞄を片付けたりスマホをいじったりしていた。ロースクール生という肩書きを背負っていても、金曜の夜の解放感を前にして崩れ去るのは、他の学生たちと何ら変わりない。なにせ大部分が血気盛んな20代後半から30代前半の学生なのだから。前の席に座ったある男子学生は、すでに教科書を閉じ、同期たちと夜の飲み会の場所をメッセージで調整しているようだった。

教壇に立つ若い民法の教授は、学生たちの散漫な空気に気づいたのか、眼鏡を掛け直して空咳をした。彼は普段、進度に敏感な方だったが、今日に限っては妙に余裕のある表情だった。

「さて、今日は普段より進度が早かったですね。おそらく30分ほど早く終われそうです」

「おお～～」

教授の言葉が終わるや否や、講義室のあちこちから短い歓声と安堵の吐息が漏れた。しかし、教授は手のひらをかざして学生たちの興奮を鎮めた。

「ですが、このまま帰してしまうのは少し名残惜しいですね。学期の初めに、時間が足りなくなるかと飛ばしていた部分を補足して、今日の授業を終わりにしましょう。皆さんの気持ちは分かりますが、すぐに終わりますから、もう少しだけ集中してください」

学生たちの間から「あーあ……」という不満の声が波のように押し寄せたが、教授は意に介さず、黒板にチョークで大きく文字を書き連ねた。

「さあ……ごめんなさいね、本当にすぐ終わらせますから。権利変動の部分と法律行為の部分について、少し説明してみましょう」

［ 立証責任 法律要件分類説 ］

「ローゼンベルクの法律要件分類説について、手短に触れておきます。弁護士試験の体制下では、事実上、記述式の不意打ちとして出題されにくいテーマなので、皆さん疎かにしがちですが、実務的には最も重要な概念の一つです」

講義室の中央あたりで、ヨン・ムンギョンは端正に撫でつけた髪の毛一筋すら乱すことなく、教

授の言葉を書き留めていた。彼女の隣の列の斜め後ろでは、ユ・プルムが斜めに座って頬杖をついていたが、普段の野性的なエネルギーとは裏腹に、妙に沈んだ眼差しでムンギョンの後ろ姿をねっとりと見つめていた。

「法律要件分類説の核心はこれです。各当事者は、自分に有利な法律効果を規定した法規の要件事実について、立証責任を負うということです。立証責任という言葉は日本式の漢字だという話があり、最近は証明責任という言葉をよく使いますが、私も古い人間なもので、立証責任という言葉が口に馴染んでしまっていますね」

すぐに終わらせると言ったものの、話が長引く教授だった。

「ともかく、権利発生事実は権利を主張する者が、権利障害、消滅、阻止事実はそれを争う相手方が証明しなければならないのです」

教授の乾燥した声が続く中、ムンギョンとプルムはすでに本の中の活字ではなく、互いの存在に意識を集中させていた。司法試験時代ならいざ知らず、今の弁護士試験体制において、この理論は学術的な装飾にすぎなかった。ましてや法学部出身のムンギョンとプルムにとっては、すでに分かりきっている部分でもあった。だからだろうか。上の空だった二人にとって、その単語たちは妙なことに、頭の中でまったく別の文脈へと生々しく再解釈され始めていた。

ムンギョンはペンを握る手にぐっと力を込めて考えた。328号室という狭い領土で得た平穏な占有権は『権利発生事実』だ。だが、あの野蛮で下品なユ・プルムの存在は、私の日常を妨害する『権利障害事実』に他ならなかった。先の中間テスト直後、負けた方が部屋を出ていくという条件で始まった地獄のような汗と快楽に塗れた泥沼バトル。どちらも一切の優位を譲らず、誰も主導権を握れないまま四肢を絡ませ、もつれ合って果てる抜きつ抜かれつの攻守の逆転を繰り返した末、結局は引き分け（互角の戦い）に終わったあの夜。限界まで体力を削り合い、荒い息を喘がせながらも意地の張り合いで最後まで屈しようとしなかった。ムンギョンの下腹部の奥深くでは、互いにイキ合い、共倒れになるように同時絶頂を迎えたあの時の興奮が入り混じった熱気が、再びドクンと脈打ってうごめき出した。彼女は、プルムをあの部屋から完全に『消滅』させたかった。

プルムもまた、似たような妄想に浸っていた。分厚いブラカップの下に隠された乳首が、講義室の冷たいエアコンの風のせいなのか、あるいはムンギョンへの憎悪のせいなのか、硬く緊張してツンと勃起していた。ロースクール入学と寮の入室申請は『権利発生』だが、ヨン・ムンギョンのあの気取った白々しい吐息を毎晩聞かされるのは、明白な『権利阻止事実』だった。底なしの負けず嫌い同士、どちらも引かずに貝合わせ（フロット）で互いの秘裂を執拗に擦り合わせ、体力が尽き果ててゼェゼェと喘ぎながらも快楽の泥沼でもがき合った記憶が蘇る。プルムは、ムンギョンのあの気高いフリをした仮面をひっぺがし、彼女が自分の足元で雌犬のように泣き喚き、自分のメスとしての優位性を認めさせたくてたまらなかった。

「結局は、証明（しょうめい）の問題なのです」

教授が黒板に書かれた『証明』という文字に下線を引いた。

「皆さんが弁護士になれば、真実が何であるかではなく、誰がより裁判官に確信を与えるほど『証明』できるかを争う喧嘩屋になります。証明されていない事実は、法的に存在しないのと同じなのです」

「聞いたことがあるでしょう？　刑法において有罪と認定するためには90%の確信、つまり合理的な疑いの余地のない証明が必要ですが、民法においては70%の確信、すなわち高度の蓋然性があれば要件事実を証明できるのです……」

教授の声がモゴモゴと続いていたが、ムンギョンとプルムの耳にはもはや入っていなかった。証明しなければならない。証明して、あの女をあの部屋から追い出さなければならない。

講義室の中も、すでに授業の終了を予感した学生たちの鞄のジッパーの音や、ざわめきが始まっていた。教授が最後の言葉をまとめながら大して気に留めていない、その混沌とした隙を突いて、二人の女の視線が空中で真正面から激突した。

ムンギョンはほんの少しだけ顔を振り向き、プルムを睨みつけた。端正な微笑みの裏に隠された青白い殺気がプルムの心臓を突き刺した。プルムも負けじと顎をしゃくり上げ、ムンギョンの目を射抜くように睨み返した。ギラギラとした欲望と征服欲が宿る眼差しだった。周囲の騒音はホワイトノイズのように遠ざかり、ただ二人の間にピンと張り詰めた弓弦のような緊張感だけが空間を支配していた。

『立証してあげるわ。あんたが私の下でどれほど惨めに崩れ落ちるかを』

『証明してやるよ。お前が私には何一つ敵わないってことを』

無言の宣戦布告が交わされた。期末テストが終われば、来学期の去就を決めなければならない機会が訪れる。それまでに、あの仇のような女に自身のメスとしての優位性をはっきりと刻み込み、彼女の降伏という『自白』を引き出して勝負をつけるという決意が固まっていた。328号室をそっくり独り占めし、残りのロースクール生活を勝者の余裕で過ごしてやるという、底なしの負けず嫌いの意地が、二人の女の全身を駆け巡った。

教授がついに「以上です。良い週末を」と宣言した瞬間、二人の女はほぼ同時に視線を外し、席から立ち上がった。

[2015年5月1日。金曜日。午後。法学館前]

ロースクール入学後、初めて直面した中間テストという巨大な嵐が過ぎ去り、キャンパスにはようやく5月の気だるげな平和が舞い降りていた。この金曜日は、テストが終わってから初めて迎

える完全な金曜日と言っても過言ではなかった。法学館の建物の外へと溢れ出てくる学生たちの顔には、ここ数週間彼らを押し潰していた神経質さの代わりに、解放感の入り混じったのんびりとした空気が滲み出ていた。

キャンパスのあちこちは早くも賑わっていた。三々五々集まった同期たちは、今夜の予定を立てるのに余念がなかった。

「今日の夜はマジで美味いもん食おうぜ。寮の飯なんてもうウンザリだろ？ 街に繰り出そう！」

「私は今日映画見るの。今まで見れなかった分、全部イッキ見してやるんだから！」

「とりあえずソメク（焼酎のビール割り）からいかないとな。今夜は誰も家に帰さねーぞ！」

美味しいものを食べに行こうと誘うグループ、溜まっていた映画を見るという人たち、そして冷たい酒を一杯引っ掛けてストレスを吹き飛ばそうという連中で、法学館前の広場は和気あいあいとした雰囲気が漂っていた。入学当初のぎこちなさは、中間テストという山を一つ越え、それを一緒に乗り越えたという連帯感からか、すっかり影を潜め、むしろすっかり親しくなったような印象すら受けた。

その中心に、ヨン・ムンギョンとユ・プルムがいた。

「ムンギョンさん、プルムさん！　ちょうど良かった。俺ら、今日街に新しくできたフュージョン和食の店予約したんだけど、一緒に行かない？」

「先輩たち、今日の夜映画見に行くことになったんですけど、一緒に行きましょうよ。私ポップコーン奢りますから！」

「ショッピングはどうですか？　テスト期間中ずっとジャージばっかり着てたから、マジで服買いたくて死にそう」

「冷たいビール一杯どう？ 別の場所で遊んでから、遅い時間にでも合流しようよ！」

際立った美貌に加え、法学専攻者特有の老練さまで備えた二人は、男子学生にとっては羨望の的であり、女子学生にとっては憧れのロールモデルだった。一緒にご飯を食べよう、お酒を飲もう、買い物に行こうという誘いが殺到した。しかし、ムンギョンとプルムは示し合わせたかのように柔らかな微笑みを浮かべ、それらの誘いを断った。

「本当にありがたいんですけど、申し訳なくてどうしましょう。私は今週末、どうしても実家に帰らなくちゃいけなくて」

ムンギョンが特有の端正な声で口火を切ると、隣にいたプルムも頷きながら調子を合わせた。

「そうなんです。実は私たち、先週二人とも実家に帰らなかったんですよ」

同期たちは意外そうな顔をした。先週の金曜日、テストが終わるや否や皆が荷物をまとめて帰省する中、二人は寮に残っていたからだ。プルムは照れくさそうに頭を掻きながら言葉を続けた。

「先週は……私がYouTubeで見た川沿いのレコードショップにハマっちゃって、そこを見に行ったら時間が経つのを忘れちゃって。アナログな感性がすごく良くて、レコードを眺めてたら汽車の時間を逃しちゃったんです」

ムンギョンも静かに言葉を添えた。

「私も先週、学校の裏山の中腹にあるカフェに行ったんですけど、山風がすごく涼しくて、ずっと座ってたんです。コーヒーを飲みながらぼんやりしてたら、時間がすっかり遅くなっちゃって……。その後から、週末はずっとテストの疲れが一気に来たのか、体調が優れなくて。だからそのまま部屋で休むことにしたんです」

二人の女は互いの顔を見ることすらなく、見事に嘘を混ぜ合わせた。先週の金曜の夜、328号室の玄関ドアが閉まるや否や自慰行為を見せつけ合い、互いを罵り、結局は爆発して相手の髪を掴み合い、下着姿で取っ組み合いの喧嘩とセックスまがいの汗と快楽に塗れた泥沼バトルを繰り広げたあの熱い記憶は、完全に洗濯され「休息」という名でラッピングされた。

「今週は絶対帰らないと。お母さんが作ってくれる実家のご飯が恋しくてたまらないんです」

プルムが豪快に笑いながら言った。

「私も、うちのお母さんのご飯がずっと頭から離れなくて、今回帰らなかったら病気になりそうです。お父さんにも会いたいし……今週末は家族水入らずで過ごそうと思って」

ムンギョンもまた、その端正な唇で「親孝行な娘」の顔を誇示した。

「うちの両親も待ってるって言うので。今週末は少し甘えてこようと思います」

プルムも両親の存在を引き合いに出し、同期たちは名残惜しそうにしながらも、仕方ないという表情を浮かべていた。

「うわー、やっぱり綺麗な人は心も綺麗なんだね。親孝行だね、親孝行！」

「そうそう、両親に会いたい時は帰らないとね。実家のご飯しっかり食べて、また月曜日に会おう！」

同期たちの称賛混じりの見送りを背に、ムンギョンとプルムは並んで寮の方向へと歩みを進めた。人々の視線から外れるや否や、二人の間に流れていた温かい気流は瞬く間に冷たく凍りついた。

[2015年5月1日。金曜日。午後。青雲館 328号室]

同期のグループから離れ、寮に向かう時までは周囲の視線のために維持していた白々しい距離感は、寮の3階の廊下に入った途端に崩れ落ちた。廊下の突き当たりにある328号室に向かって歩く二人の女の歩幅は、約束でもしたかのように速くなった。抜きつ抜かれつしながら、靴と床が立てる音が廊下の静寂を破っていた。どちらが先ということもなく、相手より半歩でも先んじるために肩がぶつかるほどに縮まるその距離は、彼女たちの心理的な距離とは反比例していた。

ついに328号室のドアの前にたどり着いた時、ムンギョンとプルムは同時にドアロックへと手を伸ばした。ピピッ、という神経質なアラーム音と共にドアが開くや否や、二人の女は互いを押し退けながら狭い玄関へと雪崩れ込んだ。

「あー、ちょっと退いてよ！」

プルムが先に靴を脱ごうと腰をかがめると、ムンギョンも負けじと狭い上がり框の上に足を踏み入れた。その過程で、二人の女の下半身が激しく衝突した。タイトなジーンズを穿いたプルムの弾力がありながらも柔らかな尻と、柔らかい素材のスラックス越しに浮き出るムンギョンの滑らかでありながらも張り詰めた尻が、「パンッ」と音が鳴るほどにぶつかり合った。

20代後半。運動はあまりしていなかったが、若さという名の暴力、まだ最高に美しい年齢。二人の女の張りがありながらも柔らかな尻が、狭い玄関の空気を一気に肉感的なものへと変えてしまった。ジーンズ越しに伝わるプルムの弾力と、薄い布地を通して感じられるムンギョンの柔らかくも力強い肉の圧迫。互いの体温が尻の筋肉を伝ってビリビリと伝わるその瞬間、玄関の温度は瞬く間に沸点を超えた。

「何？ 私の尻に一回こすりつけてみたかったの？ 私の尻が羨ましいわけ？」

「あんたごときの尻のどこが羨ましいのよ？　あんたこそ、私の尻に一回でも触りたくてこんな状況作ったんじゃないの？」

理不尽なイチャモンをつけ合う二人だった。

「はっ、マジで……靴一つまともに脱げなくてこのザマ？　あんたさっき同期たちの前で親孝行な娘のコスプレしてた、あの気高いヨン・ムンギョンで合ってる？」

プルムは止まらず、靴の片方を乱暴に脱ぎ捨てながら皮肉を言った。ムンギョンもまた、乱れたブラウスの袖を荒々しく捲り上げながら毒舌を吐き捨てた。

「あんたこそ、川沿いのレコードショップ？ アナログな感性？ 笑わせないでよ。あんたの口からそんな白々しい言葉が出るたびに、私の胃の中がひっくり返るかと思ったわ。あんたの下から漂ってくるその匂いやら、どうにかしたらどうなの？」

「なんだって？ 山の中腹のカフェで風に当たってた聖女様は、先週の金曜の夜、私の下で漏らしてたあの喘ぎ声は全部忘れたみたいね？ カフェじゃなくてベッドの上で、あんたの体がどれほど卑猥に捻れていたかってこと？」

プルムの挑発に、ムンギョンの瞳がブルブルと震えた。

「喧嘩売ってんの？ 今？」

「喧嘩？ 私があんたに？ あんたこそ、今から家に帰る前に私に一発ぶん殴られたくてウズウズしてんじゃないの？」

「誰がビビると思ってんの？ それに喧嘩はあんたみたいな劣等な女が売るもんでしょ。私があんたなんかに喧嘩売るレベルに見える？ 何度も喧嘩売るなら、今回こそあんたが私の下で這いつくばって出ていくことになるわよ。這いつくばって家に帰りたいの？」

ムンギョンが唸り声を上げながらプルムの胸ぐらを掴み、下駄箱の壁に乱暴に押し付けた。今や闘争の方向性は明確になった。単なる口喧嘩ではなかった。口では互いを殴ってやると脅しをかけていたが、実はわかっていた。相手にオーガズムという名の屈辱を与え、自分の方がメスとして優越しており、本当に発情しているのは「あんた」だという事実を証明したかったのだ。

二人の女は磁石に引き寄せられるように体をぴったりと密着させた。薄いTシャツとブラウス越しに、二組の胸が正面から衝突した。ムンギョンは自身の豊満な胸でプルムの胸を押し潰すかのように圧迫し、プルムも負けじと肩に力を入れてムンギョンの胸部を押し返そうと努力した。ブラジャーのワイヤーが互いの肉に食い込む圧迫感と、その隙間から伝わる心臓の鼓動の振動が、狂気を帯びた興奮を煽り立てた。

二人の乳首は主の心も知らずにツンと勃起した。いや、考え直してみれば、むしろ主の心を完璧に反映しているのかもしれなかった。相手の胸に向けて鋭く突き立てる攻撃態勢をとっているのだから。

「はぅ… くっ…」

プルムの手が先に動いた。彼女はムンギョンのスラックスの上、股の間に手を乱暴に突っ込んだ。ムンギョンもまた、プルムのタイトなジーンズのジッパー部分を手のひら全体で覆い、秘裂を刺激し始めた。粗いデニム生地の質感と薄いスラックスの柔らかさが指先で交差した。

「ふん… これがしたくて、どうやって我慢してたの？」

「あんたこそ恥ずかしくないわけ？ どうしてすぐにここに手が伸びるのよ？」

「イカれビッチ、あんたが匂いをプンプン漂わせてたからでしょ」

「それ、あんたから漂う匂いを私になすりつけたいだけじゃないの？ 恥ずかしいんでしょ？」

「これ見てよ……クソビッチ、もう股の間がホカホカじゃない。口では親孝行がどうとか言ってたのに、下はもう私に突かれたくて発情してるのね？」

プルムの手のひらが、ムンギョンの陰毛と秘唇の部分を服の上から執拗に擦り上げた。ムンギョンは喘ぎ声を飲み込みながら、プルムの耳元に唇をぴったりと寄せた。

「黙れ、発情してるのはあんたよ……あんたのジーンズがもう自分の愛液でぐっしょり濡れてるのが、私の手に全部伝わってきてるんだけど、どの口が言ってんの？ この下品な女……」

ムンギョンも負けず嫌いを発揮した。強く、しかしやりすぎないように、前回の互角の戦いの記憶を呼び起こし、この女がどんな圧力を好んだか記憶を引っ張り出そうと努力しながら、プルムの耳に挑発を吹き込んだ。

互いを「クソビッチ」「発情女」と呼び合いながら交わされる挑発的な会話は、快楽の導火線となった。狭い玄関の床に靴が散乱し、二人の女の影が壁面を奇怪に揺さぶった。服を着たまま繰り広げられるこの暴力的な刺激は、互いの理性をズタズタに引き裂いた。

その時だった。

「おい、今日マジでヤバかったよな？」

「ほんとそれ、さっきあの教授が焦ってたの見た？」

「あーあ、授業ちょっと早く終わらせてくれればいいのに。とにかく細かいんだよな」

ドアの向こうの廊下から、騒がしい笑い声と足音が聞こえてきた。同期たちも今まさに寮の建物の中に入ってきたようだった。今にも328号室のドアの前を通り過ぎそうなその音に、もつれ合っていたムンギョンとプルムの体が同時に硬直した。

「ひっ…！」

ムンギョンはプルムの肩をきつく掴んで息を呑み、プルムもまたムンギョンの股の間に突っ込んでいた手を止めたまま、唇を噛み締めて息を殺した。狭い玄関の中には、互いの熱い鼻息と、廊

下の向こうの同期たちの軽いおしゃべりの声だけが、極端なコントラストを成していた。バレればすべてが終わるという恐怖と、その恐怖がもたらす奇妙な高揚感が、二人の女の下腹部をさらに熱く火照らせていた。

二人の女は互いの目を射抜きながら、肺の奥深くに空気を閉じ込め、いかなる音も出さないように必死に耐えた。二人の女の息遣いが重なり、リズムが一致し始めた。

328号室の玄関がどんな状況なのか知る由もない同期たちの笑い声は、薄い鉄扉一枚を呆れるほどクリアに通り抜けて聞こえてきた。先ほどまで外で一緒に笑い合いながら実家の話をしていたあの日常的な会話が、ドア一枚を挟んでこれほどまでに脅威的なBGMに変わり得るという事実が、鳥肌が立つほど鮮明だった。

バレたら終わりだ。男たちにとっては妄想の的であり、女たちにとっては偶像であるヨン・ムンギョンとユ・プルムが、荷物もまとめずに狭い玄関の床で互いの股ぐらを掴み合い、発情した獣のようにもつれ合っているという事実が知れ渡った瞬間、何が起こるか想像するのも恐ろしかった。

しかし、その恐怖は逆説的に二人の女の末梢神経を鋭く研ぎ澄ませた。音を出さないように必死に耐える静寂の中で、互いの手は、主導権を絶対に渡すものかと言わんばかりに忙しく動いていた。視線は虚空で火花を散らしながら絡み合い、唇は悲鳴を飲み込むために潰れるほど噛み合わされていたが、指先は相手を破壊し屈服させるために、この上なく機敏に残酷に動いた。

プルムはムンギョンの薄いブラウスの上から、彼女の胸を荒々しく鷲掴みにした。手のひら全体に伝わるムンギョンの豊満な乳房の柔らかさと、その中で感じられる硬いしこりの抵抗感が、プルムの征服欲を刺激した。ムンギョンも負けじと、プルムの薄いセーター越しに彼女の胸を乱暴に揉みしだいた。端正に整えられた手でプルムの胸板を揉みくちゃにしながら、妙な痛みと快楽を同時に与えた。

「くっ…！」

ムンギョンは唇の隙間から弾け出そうになった短い喘ぎをかろうじて塞いだ。プルムは隙を突くようにムンギョンの尻をきつく鷲掴みにし、自分の方向へと荒々しく引き寄せた。タイトなスラックスとジーンズが摩擦し、熱気を放った。二人の女の下半身が隙間なく密着すると、ムンギョンの濡れそぼった秘唇が、プルムの弾力のある太ももの内側の肉に正面から触れた。薄い布二枚を挟んで伝わる湿った温もり。

「んっ…！」

ムンギョンは歯を食いしばった。すぐさま反撃に出た。プルムは顎の筋肉が浮き出るほど力を込め、弾け出そうな喘ぎを喉の奥深くに押し込んだ。彼女は負けまいと片方の太ももを持ち上げ、プルムの股の間を強くこじ開けて入った。プルムのジーンズの縫い目が敏感な粘膜の上を乱暴に

引っ掻きながら通り過ぎると、脳を貫くような痺れる戦慄が押し寄せた。本当に容易ではない忍耐だった。目の前が真っ白に明滅し、膝の力が抜けてへたり込みそうになったが、プルムはムンギョンの肩に爪が食い込むほどきつくしがみついて耐え抜いた。

廊下の外は相変わらず騒がしかった。

「おい、この調子で進んだら、今回の期末テストのマジで範囲ヤバくね？」

「ほんとそれ。俺、今回民総のせいで留年になったらマジで退学するわ。俺、法学の才能ないみたい」

「民総の教授、去年も一人留年させるためにFつけただろ……拝み倒して、あの先輩のためだけのテストを作って救済したらしいじゃん」

「マジで？ えげつねぇな……それも院長にやれって言われてやったらしいぜ（笑）」

「だからあの先輩、どういうユネだよマジで」

同期たちはまさにドア一枚隔てた所で足を止め、会話を続けていた。彼らの声がこれほど鮮明に聞こえるということは、逆にこの部屋の中で起こる小さな摩擦音や喘ぎ声さえも、廊下の突き当たりまで響き渡り得ることを意味していた。

瞬間、ムンギョンとプルムの頭の中に同時に「後悔」という単語がよぎった。

『どうしてよりによってここで……こんな狂った真似を……』

『あいつら、なんでここ……で喋ってんのよ。部屋に……入らないで……』

単なる負けず嫌いの意地に巻き込まれ、制御できなかった本能がもたらした状況は、想像以上に恥ずかしく、屈辱的だった。しかし、その後悔は刹那にすぎず、互いに対する憎悪と征服欲はさらに熱く燃え上がった。ここで先に手を引く方が「敗北者」になるという暗黙のルールが、彼女たちをさらに狂気を帯びた没入へと導いた。

「はぁ……はぁ……」

息遣いさえも慎重だったが、互いのうなじを伝って流れる熱い鼻息は、すでに理性を焼き尽くすのに十分だった。ムンギョンはプルムの胸をさらに濃密かつ露骨に揉みしだき始めた。まるで一生女を見たこともない飢えた男が、初めてのセックスで恋人の肉体を貪るかのように、彼女の手つきは精巧な技術の代わりに荒々しく野蛮な力に満ちていた。プルムのブラがムンギョンの手の中でねじれ、胸の肉を容赦なく押し潰した。それと同時に、目線では絶えず声なき挑発を続けていた。

『ユ・プルム……狂いそう？ 胸をこんなに揉みくちゃにされるのがそんなに好き？ すっかり発情しちゃって。あんたは私に負けるのよ』

プルムも負けていなかった。彼女は尻に思い切り力を入れ、裏ももが石ころのように硬くなるほど緊張させた。そして、その硬い筋肉を利用してムンギョンの秘裂をさらに深く強烈に圧迫した。ムンギョンのスラックスが濡れていく感触が、自分のジーンズ越しにも生々しく伝わってきた。プルムはムンギョンの耳元に唇をぴったりと寄せ、到底外には出せない罵詈雑言を視線で射抜いた。

『これ見てよ、ヨン・ムンギョン。あんた今、正気じゃないでしょ？　廊下に同期たちがいるのに、下はこんなにドロドロに濡らして私の脚にこすりつけてるじゃない』

ムンギョンの瞳が白目を剥く一歩手前だった。下腹部から始まった熱い波動が全身を切り刻みながら、快楽の極みへと追い詰めた。今にも喘ぎ声が弾け出そうだった。喉の奥がむずがゆく、肺の空気が悲鳴のように溢れ出そうとしていた。ムンギョンはプルムのセーターの裾をきつく握り締め、その途方もない快楽を内側へと飲み込んだ。

プルムも腰がビクビクと震え、崩れ落ちる寸前だった。餅をこねるように揉みしだかれる胸から始まった興奮が体の隅々を舐めるように通り過ぎ、ついには最も秘められた場所へと到達する感覚だった。もはや喘ぎを我慢するのは限界だった。呼吸をできる限り整えようとしているが容易ではなく、罪のないムンギョンのブラウスだけを握り締めながら興奮を飲み込んでいる最中だった。

「……ふぅっ」「くっ……」

ムンギョンの唇の隙間から細い悲鳴が漏れ出そうになるたび、彼女は肩を震わせて必死にそれを飲み込んだ。プルムも同じだった。鼻先を伝って流れる汗の粒がムンギョンの頬の上に落ちたが、それを拭い去る余裕すらなかった。ゼェゼェという押し殺した息遣いが狭い下駄箱の壁にぶつかってこだましているかのようで、その音さえも外に漏れるのではないかと、彼女たちは互いの肩をへし折る勢いで掴み合った。

互いの目が虚空で再び衝突した。汗に濡れて乱れた前髪の隙間から見える相手の瞳は、すでに理性を失っているように見えた。ムンギョンは、プルムの瞳が普段より見開かれており、その中がただ征服欲と快楽だけで満たされ臨界点に達しているという事実を本能的に悟った。しかし、それはプルムだけの状態ではなかった。ムンギョン自身もすでに限界だった。下腹部から始まった痙攣が全身へと広がり、今すぐにでも悲鳴を上げて床を転げ回りたいという衝動が彼女を支配した。

このまま放っておけば、どちらが先に破裂するかわからなかった。そして、その喘ぎ声は即ち社会的な破滅を意味していた。どちらが先だったのかはわからない。ムンギョンがプルムのうなじ

を引き寄せたのか、それともプルムがムンギョンの顎を掴んだのか、前後関係を問うのは無意味だった。

二人の女の唇が磁石のように激しくぶつかり合った。

それは決して愛の行為ではなかった。相手を慰めるための口づけでもなかった。それはただ、悲鳴を塞ぐための「猿轡」であり、相手が声を出して自分まで破滅させるのを防ごうとする利己的な生存本能の表れだった。

「んっ」「んんっ……！」

唇が噛み合うと、外に弾け出そうになっていた喘ぎは互いの口の中へと散って消えた。口が塞がれると、本能的に鼻で息を荒らげ始めた。異常に速く熱い吐息が互いの頬を掠めて出入りした。吸い込む量より吐き出す量の方が多いような荒い呼吸が続き、その熱い空気は二人の間の緊張感をさらに奇怪に高揚させた。

しかし、おかしかった。間違いなく憎悪と軽蔑を込めて相手を黙らせるために始めたキスだったのに、その感触は奇妙なほどに甘かった。普段、男たちと交わしていたキスとは根本的に違った。男の唇から感じられた無骨さや、鼻の下や顎先をチクチクと刺激する粗い髭のジョリジョリ感はどこにもなかった。

ムンギョンの唇はプルムのものと同じくらい柔らかく、プルムの肌はムンギョンのものと同じくらい滑らかだった。髭一つない柔らかな互いの鼻の下が触れ合い、ふっくらとした顎先が重なる感覚は、生々しくも中毒的だった。

しかし、その柔らかさとは対照的に、舌の動きは残酷なほど乱暴だった。互いの唾液が入り混じり、舌の根が引き抜かれるように絡み合う過程で、歯と歯がぶつかるカチカチという音がした。ムンギョンはプルムの舌を噛み切るように押し出そうとし、プルムはその舌を包み込みながらさらに奥深くへと侵入した。長い間、男の手が触れていなかった体が、この奇怪な女性間の接触に過敏に反応し、快楽の回路を生々しく再配置していた。

その瞬間、理性の糸が完全に切れた。

二人はほぼ同時に互いの下半身へと手を伸ばした。ベルトを外したりボタンを外したりする手順など贅沢だった。プルムはムンギョンのスラックスのウエスト部分を乱暴に引っ張って手をねじ込み、ムンギョンもまたプルムのタイトなジーンズのボタンの上から無理やり指を押し込んだ。硬いデニム生地と薄いスラックス素材が手の甲を引っ掻き痛みを生じさせたが、二人にそれを気にする余裕はなかった。

「はぁっ……」「んんっ……！」

指先に触れた現実は衝撃的だった。ショーツはすでにその機能を果たせないほどぐっしょりと濡れており、その奥の陰毛までもが愛液を含んでドロドロに絡み付いていた。二人の女は、相手の内部が自分と同じようにこれほど熱く湿って開いているという事実に安堵していた。

もう少しで相手をオーガズムへと突き落とせるということを本能的に悟った二人の女は、前回の戦いで刻み込まれていた互いの弱点を容赦なく攻略した。ムンギョンはプルムの最も深く敏感な場所、指を曲げてようやく届くそのザラザラとしつつもふっくらとしたGスポットに向けて、中指と薬指をためらうことなく突き刺した。

「んんっ！ んんんっ！」

プルムの瞳が白目を剥き、体が弓のように反り返った。しかしムンギョンは止まらなかった。挿入した二本の指を鉤爪のように立てて膣壁をこき下ろすと同時に、手のひらの下部の膨らんだ部分ではプルムの肥大化したクリトリスを強烈に擦り上げた。乱暴に擦り付けられる圧力と内部をかき回す指の調和は、プルムの精神を粉々にするのに十分だった。

プルムもまた、ムンギョンに同じ地獄と天国を与えた。ムンギョンだけがプルムの弱点を知っているわけではなかった。彼女はムンギョンの狭い入り口を無理やりこじ開けて指を突き入れ、ムンギョンが最も耐えられないリズムでクリトリスとGスポットを同時に刺激した。指先に引っ掛かるムンギョンの熱い粘膜がブルブルと震えるのが、プルムの手の甲にまでそのまま伝わってきた。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ」

どちらの声とも知れない、息を止める音。

興奮度はもはや制御不能なレベルだった。二人の女の体は、手狭な玄関にかろうじて立ったまま、一つになって震えていた。唇は依然として噛み合ったまま悲鳴を内側へと飲み込み、鼻からは獣のような荒い息が噴き出した。オーガズムの波が足の先から頭のてっぺんまで、津波のように押し寄せてきた。

ついに、限界点が弾けた。

「あうぅぅんッーー！」

ムンギョンとプルムはほぼ同時に全身を痙攣させ、壮絶な互いにイキ合う同時絶頂を迎えた。脳細胞が焼き切れるような真っ白な閃光の中で、彼女たちは互いのうなじをむしり取るようにしがみついていた。

しかし、その快楽の絶頂で予期せぬ事故が発生した。オーガズムの余波で全身の筋肉から一気に力が抜けてしまったムンギョンがバランスを崩し、横にふらついたのだ。プルムにもまた、彼女

を支える力はなかった。

ガンッーー！

二人の女の体がもつれ合ったまま、冷たい鉄製の玄関ドアに乱暴にぶつかった。狭い廊下に鈍い金属音が響き渡った。

「え？ 何？ なんの音？」

ドアの外の廊下でおしゃべりをしていた同期たちの声が一瞬にして静まり返り、疑念の入り混じったざわめきに変わった。

「え、なんの音？ 俺聞こえなかったけど？」

「いや、ドアに何かがぶつかる音がしたような……」

足音がドアの方へと近づいてくるのが感じられた。ムンギョンとプルムは身の毛のよだつような恐怖に包まれた。絶頂の残滓のせいで全身がブルブルと震え、下は依然としてズキズキと疼いていたが、彼女たちは必死に音を殺した。ムンギョンは唇を噛み締めて喘ぎを塞ぎ、プルムは床に散乱した靴の上に倒れ込んだまま、息の音さえ出さないように胸を圧迫した。

時間が止まったかのような静寂が流れた。

「……なんだ、積んであった荷物が崩れたんじゃないの」

「ムンギョンとプルム、実家に帰るって言ってたじゃん。荷物持って帰ろうとしてドアにぶつかったんだろ」

「いや、そもそも音なんて聞こえた？ 俺聞こえなかったけど？」

胸が張り裂けそうな緊張感の中、幸いにも同期たちは特に疑うことなく会話を続け、それぞれの部屋に入っていく音が聞こえた。「ガチャッ、ガチャッ」と他の部屋のドアロックが閉まる音が聞こえるたび、ムンギョンとプルムはようやく肺に閉じ込めていた熱い息を、非常にゆっくりと、慎重に吐き出した。

動きを止めた二人のせいでセンサーライトが消え暗くなった玄関、靴が勝手に散らばったその手狭な戦場で、二人の女は依然として互いの指を相手のズボンの中に突っ込んだまま、汗まみれの顔で互いを見つめ合っていた。まさに汗と快楽に塗れた泥沼バトルの果ての、共倒れの光景だった。

[2015年5月1日。金曜日。午後。青雲館 328号室] - しばらくして

328号室の玄関は静寂に包まれた。廊下から聞こえていた同期たちの足音が完全に消え去った後も、ムンギョンとプルムはしばらくの間、誰一人として優位に立てないままグチャグチャに絡み合った体勢で硬直していた。限界まで体力を削り合い、ゼェゼェと荒く喘ぐ息遣いと激しい心悸だけが手狭な空間を満たしていたが、やがて少しずつ落ち着きを取り戻すと、代わりに互いに向けられたひどく軽蔑に満ちた視線がその場を支配し始めた。

先に手を引いたのはムンギョンだった。続いて、彼女は自身のスラックスの中からプルムのぐっしょりと濡れた指が抜け出していく生々しい感触に身震いし、体を起こした。

「汚らわしい」

ムンギョンが細い息を吐き出しながら放った最初の一言だった。彼女は汗に濡れて肌に張り付いたブラウスのボタンを乱暴に外し、プルムを見下ろした。プルムもまた、床に散乱した靴に手をついて立ち上がりながら、唇にこびりついたムンギョンの唾液を手の甲で荒々しく拭い去った。

「汚いのはあんたでしょ。ヨン・ムンギョン、自分でもわかってんでしょ？　同期たちの声が聞こえた途端、ビビって私の唇を貪り食ってたじゃない。端から見たら、私のことを愛してやまないのかって勘違いするくらいにね」

「勘違いしないで。あんたの下品な口から喘ぎ声が漏れるのを塞ごうとしただけだから。あんたが叫んだせいで私まで社会的に抹殺されるわけにはいかないじゃない。この発情ビッチ」

「はっ！　いい言い訳ね。先に舌をねじ込んでかき回したのはどこの誰よ、今さらシラを切る気？　あんたこそ私に発情してたじゃない。女とキスしたくてたまらないヤリマンみたいに発狂してたクセに」

プルムの挑発にムンギョンが鼻で笑い、彼女の鼻先へと歩み寄った。手狭な玄関で、底なしの負けず嫌い同士の視線が再び空中で凶暴に絡み合った。

「発情？　その言葉はあんたにこそお似合いよ、ユ・プルム。あんたのジーンズがその卑しい愛液でどれだけぐちゃぐちゃに濡れそぼっていたか、私の手が全部記憶してるんだけど。どの口が言ってんの？　キスは私がしたんじゃなくて、あんたが先にしたんでしょ。あんたが私のうなじをあんなに乱暴に引き寄せさえしなければ、私があんたの唇なんかに触れることはなかったわ」

「ふざけないで。あんたが先に私の唇に息を吹き込みながらすがりついてきたじゃない。『んっ、んんっ』って声出しながら私の舌を食いちぎろうとしてたアレが、キスじゃなくて何なのよ？　マジで吐き気がする。女に発情してよだれ垂らしてるメスのくせに」

口喧嘩は終わりの見えない泥沼だった。互いに相手が先に誘惑してきたのだと、相手が先に発情して獣のように飛びかかってきたのだと責め立て、己の淫らな行為の原因をなすりつけ合った。それは一種の防衛機制だった。ライバルである憎き女と、それもこの狭くて汚い玄関の床で、服

すら脱がずに激しい貝合わせ（フロット）でもつれ合って果てるように互いにイキ合うという、最悪の同時絶頂を共有してしまったーーその身の毛のよだつような羞恥心を打ち負かすための、凄絶な自己否定だった。抜きつ抜かれつの攻守の逆転の末に、どちらも屈することなく終わった互角の戦い。その汗と快楽に塗れた泥沼バトルの結果が、あろうことか共倒れ（引き分け）だったという事実を、彼女たちの並外れた意地の張り合いが許せなかったのだ。

だが、これ以上口喧嘩で無駄にしている時間はなかった。壁に掛かった時計の針は、すでに汽車の時間を指し示そうとしている。実家へと向かう汽車が自分を待ってくれるはずもなく、何より、この濃密な体臭と汗まみれになった体では、あと1分たりとも耐えられなかった。

「どいて。シャワー浴びるから」

ムンギョンがプルムを肩で突き飛ばし、バスルームへと向かった。プルムも負けじと彼女の後に続いた。

「あんただけが急いでるわけ？　私だってシャワー浴びて荷造りしなきゃなんないのよ。どいて、私が先に入るから」

狭いバスルームのドアの前で再び意地を張った肩のぶつかり合いが起きたが、結局はムンギョンが先に中へと入り、鍵をかけてしまった。プルムはドアの外で地団駄を踏みながら罵詈雑言を吐き捨てた。

「早く出なさいよ、この自己中女！　あんたがシャワー浴びてる間に汽車に乗り遅れたら、マジでぶっ殺すからね！」

バスルームの中で、ムンギョンは乱暴に服を脱ぎ捨てた。すぐさまムンギョンは、プルムの残した痕跡をただの一滴たりとも残さないとでも言うように、潔癖症のように自分の体をゴシゴシと洗い流した。

ドアの外からは、プルムが依然として鼻息を荒くしながら荷物をまとめる音が聞こえてきた。キャリーケースのジッパーを乱暴に開け閉めする音、服を放り投げる音の一つ一つに、鋭い神経質さが滲み出ていた。

しばらくして、ムンギョンが濡れた髪をタオルで包みながら外に出てくると、プルムが待っていましたとばかりにバスルームへと押し入った。すれ違うその瞬間にも、二人の女は互いに聞かせつけるように、短い断末魔のような罵倒を投げつけ合った。

「発情ビッチ。臭いんだから隅々までしっかり洗いなさいよ」

「ヤリマン女。あんたが洗ったところで、その卑しい本性が消え去るとでも思ってんの？」

バスルームのドアがバンッと音を立てて閉まった。ムンギョンは濡れた体の上に、ゆったりとしたグレーのスウェットの上下を身にまとった。他の物も持っていかなければならなかった彼女は、急いで化粧品と数冊の本を鞄にねじ込んだ。

バスルームの中では、プルムも荒々しく体を洗い流していた。彼女もまた、ムンギョンの手が触れた場所を隅から隅までゴシゴシとこすり洗いしていた。彼女は濡れた髪を適当に乾かし、黒のジップアップパーカーとジョガーパンツを着て外に出てきた。

二人の女は、それぞれのベッドの上に置かれた鞄を手に取った。もう出発しなければならない時間だった。ムンギョンが先にドアを開けて外に出ると、プルムがその後に続いた。

玄関を出る前、二人は示し合わせたかのようにふと立ち止まり、惨状と化した玄関の床を見下ろした。散乱した靴、そしてブラウスから引きちぎられたボタンが一つ、そこにぽつんと転がっていた。それは、彼女たちが先ほどまで繰り広げていた、あの醜悪でありながらも強烈だった『証明』の、唯一の物証だった。

「月曜日に会いましょう。その時までには、どうかこの部屋を出ていく決心をしてきなさい」

ムンギョンが冷たく言い放ち、廊下へと踏み出した。プルムも負けじと応酬した。

「寝言は寝て言いな。期末テストが終わってこの部屋から追い出されるのは、あんたの方だから」
ラフなスウェット姿で鞄を背負った彼女たちの後ろ姿は、表向きにはただ週末を迎えて実家へと向かう、平凡で真面目なロースクール生にすぎなかった。

しかし、彼女たちの下腹部の奥深くには、依然として互いが刻み込んだ生臭い余韻と、週末の間ずっとそれぞれの家で反芻することになるであろう自己嫌悪、そして疼くような渇望がドロドロと澱んでいた。

328号室のドアが固く閉ざされた。5月の日差しが差し込む廊下で、二人の女の白々しい平和が再び始まろうとしていた。